

名古屋大学減災連携研究センター 講演会・減災館レポート



ワーク・キューブ 吉元 学

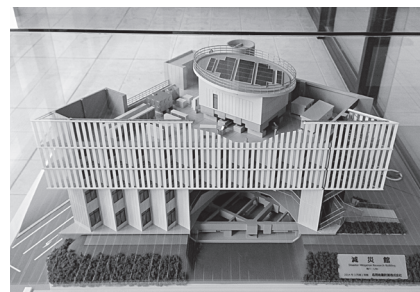
「ARCHITECT」に連載を頂いている名古屋大学減災連携研究センターに、7月19日講演会「迫りくる南海トラフ巨大地震を克服する」を聞きに行くと同時に、減災館を見学しました。東山キャンパス唯一の免震構造の建物で、地震時には最大で90cm動くそうです。講演会は鷺谷威氏「南海トラフ巨大地震を知る—基礎から最新の科学的知見まで」、武村雅之氏「歴史に学ぶ防災論—関東地震と東南海地震」、福和伸夫氏「減災館を利用し南海トラフ地震の減災対策を進める」の3部構成です。

鷺谷氏から①日本では地震と無関係で暮らすことはできない、②地震の将来予測は今の科学では困難である（やっぱり無理なんですね）、③過去に起きたことや自分の今置かれている状況、今後起きるかもしれないことを理解し、自分の頭で考えて行動しなければいけないとのお話。また、武村氏からは①「安心・安全」という言葉の使い方が気になる、安全は「心配」することによって担保される、②科学には限界がある、③科学教育がうまくいっていない、④

「便利」は人間に幸福をもたらしてくれるのか？との問いかけ。福和氏のお話は以前にも聞いたことがあるのですが「福和節」とでも言うべき名調子で、テンポよく語られました。名古屋人のプライドをくすぐりながら東京、大阪と比較し、防災の視点からナゴヤの街を語られます。①科学技術を使うのか、それともコストのために使うのか問われている、②地名にはメッセージがある「ミ」のついた地名は要注意！懇親会では岡崎の食品メーカーの方とお話ができました。「工場のあるところは砂地で地盤がよろしくない、しかし地名がブランド名になっているので移転はできない」。一筋縄では行かない問題です。③建築基準法は静的な力で検討しており万全なものではない。

近代科学の限界

近代科学には限界があることを研究者の方は感じているのではないかと思います。科学の限界というより細分化された研究がちゃんと伝わって社会のためになっているのか？という疑問です。そのた



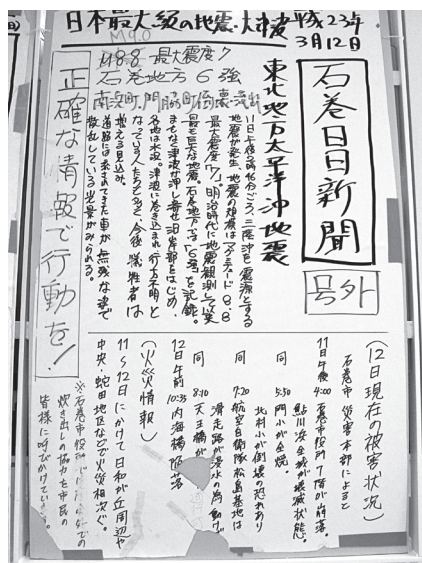
名古屋大学減災館の模型です。三角形の外観が分かります

めに研究者から直接子どもたちにメッセージが届くようになっているのはとても良いことだと思います。細分化の弊害を除くべく「減災」をキーワードにいろいろな分野の研究者が集まって、名古屋大学減災連携研究センターが設立されたのでしょ。研究者だけでなく建築家や芸術家や音楽家などもっと多様な人々が集まったら分断された科学の可能性を広げることができそうです。研究者の考えを分かりやすく一般の方々に届けたり、研究者を繋ぐのは建築家の可能性です。

福和氏に「建築設計者よ！全面ガラスはやめなさい！壁にきなさい！」とキツク言われました。

東海地区の連携の必要性

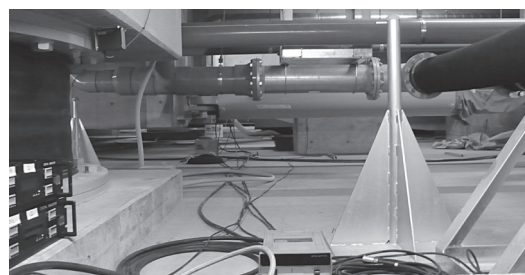
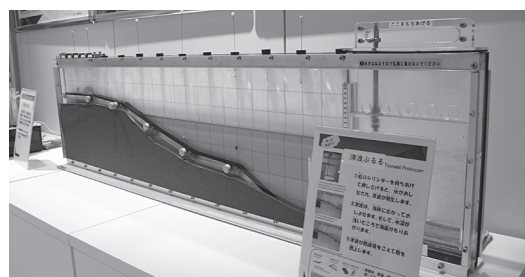
大地震の被害予想の地図を見ると、静岡・三重と愛知・岐阜では被害の違いがあります。台風の災害になればまた違う地図になります。これは東海地区が連携して対策しないといけないということではないでしょうか？早期の東海支部での災害対策委員会の設置を望みます。



石巻日日新聞、本物です。震災当時の状況が生々しく伝わってきます



名古屋市の今の地図と昔の地図を比較できます



上 | 津波やプレート型地震、液状化などの仕組みが子どもにも分かりやすく説明してあります 下 | 建物全部を約10cm引張って震度3の揺れを体験